

## 『アウグステイヌス 生涯と業績』

W・V・レーヴエニヒ著  
(宮谷宣史・森泰男共訳)

(A5・二七三頁・三八〇〇円)

日本基資教団出版局

アウグステイヌスについては、先に、本書の訳者の一人、宮谷宣史教授の『アウグステイヌス』(講談社刊「人類の知的遺産シリーズ」)があり、この偉大な人物への適切な入門書となっている。しかし、その宮谷教授と森泰男教授の共訳になる本書もまた、我々をアウグステイヌスへと誘ってくれる。

本書の第一章は、主に、アウグステイヌスの後代への、すなわち、スコラ学、中世の政治、神秘主義、宗教改革、宗教改革以後への影響について述べている。この第一章は、第二章以下を読むための詳しい目次とも言える。

第二章は『告白録』に依りつつ、アウグステイヌスへの接近の仕方が示される。著者によれば、初学者は、例えば「アウグステイヌスの人間論」などという「横断論的な」論文を最初に読むべきでなく、「とにかく、アウグステイヌスをまず第一に良く知るべきである」(二九ページ)。それ故に『告白録』が同時にアウグステイヌスへの最良の道である(三二二ページ)。第三章以下、第九章までには、アウグステイヌスの生涯が『告白録』を資料として用いつつ描かれる。特に第九章では、第一〇章で取り扱われる。アウグステイヌスの初期の諸著作の成立時期が示される。

第一一章では、牧会者としてのアウグステイヌスについて、アウグステイヌス自身の手紙や、ポッシディウスの『アウグステイヌス伝』や、ファン・デル・メールの『牧会者アウグステイヌス』に依りつつ記される。

第一二章から第一四章には、アウグステイヌスの生涯における重要な論争、すなわち、マニ教との論争、ドナトウス派との論争、ペラギウス主義との論争について記される。

「神学と哲学」と題された第一五章は、訳者あとがきでも言われているように圧巻である。著者はこの章で、アウグステイヌスのテキストに即しつつ、アウグステイヌスの「神学的、哲学的思想の概観を叙述」(一七〇ページ)する。著者はこの章を三つの項に分ける。まず第一項では、「キリスト教信仰」という題のもとに、「信仰・希望・愛」(『エンキリディオ』)という「冷静な叙述の背後にも彼の情熱的な心情や烈しい探究と追求とを感得することができる」(一七一ページ)書物が取り扱われる。この書は「彼の神学全体の最も簡潔で包括的な叙述」(一七一ページ)である。次に第二項は「三一的思弁」と題され、「神学と哲学との融合の特に顕著」(一八一ページ)な「三位一体論」が取り扱われる。著者はアウグステイヌスのこの書物について特に、「人間精神に対する三一的類似の適用は全く偉大な貢献である」(二〇五ページ)と言う。最後の第三項を

著者は、「認識論と形而上学」と題して、アウグスティヌスの「哲学の最も重要な原理を総括する課題」(二〇八ページ)に取り組んでいる。

第一六章では、「アウグスティヌスが彼の新しい教育思想を体系的に表現している資料」として『キリスト教学』が取りあげられる。(二二七ページ)。この書物は、「解釈学と説教を問題としている」(二二七ページ)。

第一七章は『神の国』という「歴史神学の偉大なドキュメント」(二四二ページ)の概説である。この概説を著者は、「全体を見渡す内容明細の主題別分類を優先させ」(二四五ページ)として為している。第一七章を閉じるにあたって著者は、アウグスティヌスが『神の国』で示した世界像が「今日ではもはや、我々の真理意識が保持しうるものとしては興味をつなぎえない」(二六三ページ)としつつ、同時に、「けれども、アウグスティヌスが、我々自身の道を見出すための助け手であることも確かである」(二六四ページ)とも言っている。説得力がある。

第一八章は最後の章であり、「終焉と発端」と題される。「終焉」とはアウグスティヌスの最期のことであり、「発端」とはアウグスティヌス主義の歴史の「発端」である。

以上みてきたごとく、本書はアウグスティヌスの生涯とその作品とを手際良く整理して、我々に示してくれた。しかし、それは単にアウグスティヌスを瞥見したというのではなかった。例えば一七章で著者は、カムラーの「(アウグスティヌスの)終末論的態度は歴史的事実の真剣な受容を不可能にする」とい

う主張を取りあげ、次のように言う。「それに対して我々は反対命題を唱えたい。歴史的事実はただ終末論的展望によってのみ意味深く、かつ受容可能となる」(二五六ページ)。著者の主張は明確である。

最後に、筆者が本書から聴いた最大の声を記したい。それは「原典を読め」という声である。適宜引用されたキー・ワード、キー・センテンスのラテン語そのものが、そう呼びかけてきた。もちろん著者は一五ページではつきりと次のように言っていた。「アウグスティヌスは言葉の巨匠でもある。……その魅力は、ラテン語原文を読むことができるもののみ、完全に明らかになる」。多忙や語学力不足を託つことなく、アウグスティヌスの原文そのものに沈潜したい。そうすれば、著者の次の言葉もきつと納得されよう。「アウグスティヌスの著作は世界的な意義を獲得している。……彼の思想の豊かさと深さに取り組めば、多くの成果を得る。人間としての、またキリスト者としてのアウグスティヌスに出会うなら、もっと直接的な接触を経験できよう」(二六七ページ)。

なお訳文は達意の文章であり、読みやすく、悪しき翻訳調は感じられなかった。

(中川 憲 次)